

国立大学法人
宮崎大学 概要 2005



宮崎大学概要 目次

○学長挨拶	2
○大学の目標・理念	3
○沿革	4
○学年暦	5
○学部・大学院・学科	
教育文化学部；学部・大学院	6
附属教育実践総合センター・附属学校	
医学部；学部・大学院・附属病院	10
工学部；学部・大学院	16
農学部；学部・大学院・別科	20
附属自然共生フィールド科学教育研究センター	
附属家畜病院・附属農業博物館	
地域農林水産業教育研究センター	
連合大学院	
○附属図書館	24
○学内共同教育研究施設	26
地域共同研究センター	
生涯学習教育研究センター	
フロンティア科学実験総合センター	
総合情報処理センター	
大学教育研究企画センター	
○キャンパスライフを支える施設	28
大学会館	
学生寄宿舍及び国際交流宿舎	
体育施設・課外活動施設	
安全衛生保健センター	
○サテライト・オフィス	30
○国際交流	31
○大学の研究紹介	32
21世紀COEプログラム	
宮崎県地域結集型共同研究事業	
都市エリア産学官連携促進事業	
○配置図（木花キャンパス・清武キャンパス）	34
○施設位置図	35
○交通案内	36



世界を視野に

地域から始めよう



大学の活性化と存続を目指して

宮崎大学長 住吉 昭信

平成15年10月宮崎大学と宮崎医科大学は統合して、教育文化学部、医学部、工学部、農学部の4学部からなる新宮崎大学を創設し、さらに平成16年4月には国立大学法人宮崎大学になりました。新しい宮崎大学のスローガンは「世界を視野に、地域から始めよう」で、宮崎大学の持てる資源を活用し、(1)教養教育の一層の充実と質的向上、(2)教育・研究基盤の強化、(3)学際領域の教育・研究の強化と創出、(4)地域および国際社会への貢献、を具体的な目標として、21世紀を展望しつつ、宮崎になくてはならない知の継承・創造の殿堂として、活気に溢れ、魅力に満ちた学風と輝くキャンパスを築き、大学自身の発展は元より、地域と連携して宮崎の文化の向上と地域の活性化に取り組んでおります。

21世紀は生命科学の時代と言われています。宮崎大学は生命科学に特色を持つ大学として、多角的かつ柔軟な教育研究活動を展開しています。基本理念は「人類の英知の結晶としての学術・文化の継承と発展、深奥なる学理の探究、生命を育んできた地球環境の保全、さらに人類の福祉と繁栄に資する学際的な生命科学の創造を指向し、変動する社会の多様な要請に応えて、柔軟かつ適切に自ら行動できる21世紀型人材を育成する」ことを目指し、共通教育部を設置し、教養教育に対する責任ある実施体制を整備し、全学の教員が協力して、教養教育のメニューを増やし、その多様性と質を確保し、異分野にも理解があり、人間性に富んだ、広く深い教養が身につけられる教育の実践と大学教育研究企画センターを設置して、学生の要望も聞きながら、常に良い教育方法を策定し、専門教育についても、深くそして応用力があり、社会に出て真に役に立つ知識、技術が身に付くよう全学的な取り組みをしており、皆さんが卒業する時に、心の底から「この大学に学んで良かった」と実感できる大学を目指して努力しております。



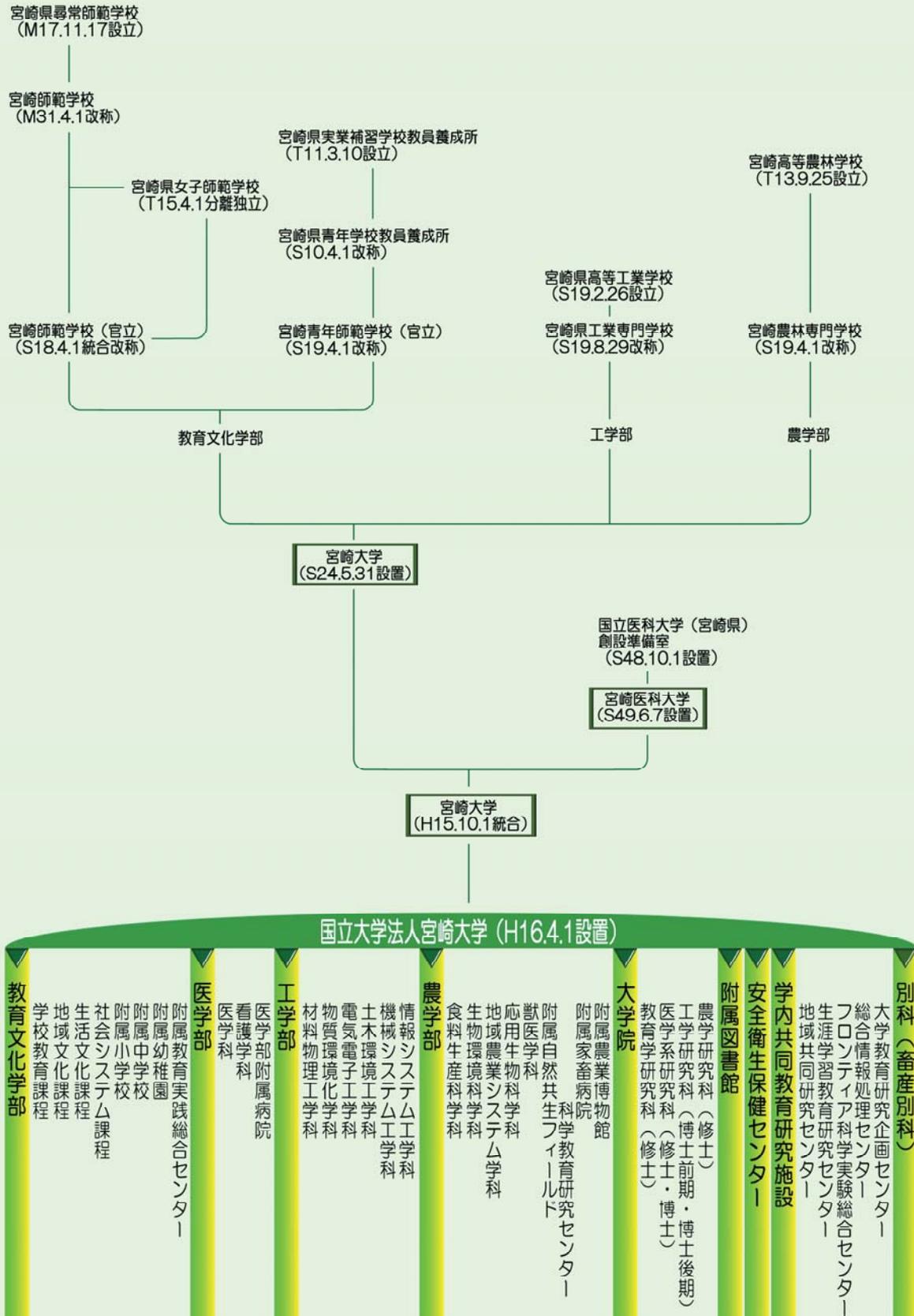
大学の目標・理念

「世界を視野に地域から始めよう」をスローガンとして掲げ、(1) 教養教育の充実と質的向上、(2) 教育研究基盤の強化、(3) 学際領域の教育研究の活性化と創出、(4) 地域社会と国際社会への貢献を具体的な目的・目標に掲げ、新しい知の創造に向けて多角的かつ柔軟な教育研究活動の展開を目指しています。

その根底をなす大学の基本理念は、人類の英知の結晶としての学術・文化の継承と発展、深奥なる学理の探究、生命を育んできた地球環境の保全、さらに人類の福祉と繁栄に資する学際的な生命科学の創造を志向し、変動する多様な社会の要請に応えうる人材の育成をはかるところにあります。



沿革



学 年 歴

- 4月 1日 学年学期始、前学期開始
- 4月 3日 入学式
- 8月 5日 夏季休業（9月30日まで）
- 9月 30日 前学期終了
- 10月 1日 後学期開始
- 12月 25日 冬季休業（1月7日まで）
- 3月 24日 卒業式・修了式
春季休業（3月25日～3月31日）
- 3月 31日 後学期終了



教育文化学部：教育学研究科



教育文化学部 《230人》《》《》()内の人数は入学定員を示します。

日本の将来を担う子供たちを教育する教員を養成し、また、日本・アジア・欧米の言語と文化、芸術と健康・生活環境といった生活文化の質の向上、法律政治・経済・福祉などの社会のシステムに関する教育と研究を行っています。

学校教育課程 (100人)

学校現場に関わる諸問題や児童・生徒の心身の諸問題、学校でどのように教えるか等について研究と教育を行い、今日の多様化した子どもたちと個性豊かに情熱をもって接することができる、感性豊かで質の高い教員の養成を、「初等教育」(55人)、「中学校教育」(35人)、「障害児教育」(10人)の3つのコースで目指しています。



地域文化課程 (30人)

語学・文学・思想・歴史学・地理学・考古学などの多角的視点から、日本・アジア文化、ヨーロッパ・アメリカ文化、文化に関わる環境、外国語コミュニケーションを学ぶ課程です。



生活文化課程 (40人)

現代の生活を多角的に捉え、未来に向かってより質の高い文化を一般生活に根づかせていくために、文化振興や生涯学習などに貢献できる人材を「芸術文化」(15人)、「生活健康」(10人)、「生活環境」(15人)の3コースに分けて養成します。



社会システム課程 (60人)

「社会システム」とは世の中のしくみのことです。世の中のしくみを研究する学問分野を社会科学といいます。社会科学には政治学・法学・経済学・社会学・地理学などがあります。社会システム課程は、未来社会のヴィジョンをイメージし、社会システムをデザインすることができ、主体的にコミュニティを担う人材を養成するために、社会科学全般を教育・研究します。



教育学研究科（修士課程）《38人》

学部教育を終えた者（現職教員を含む）を対象として、確かな教育観と幅広い視野を持ち、高度の専門知識、研究力及び実践力を持つ教員を養成するため、平成6年に設置されました。現職者のリカレント教育の要望に応えるため、①1年次のみフルタイム方式、②夜間方式、③大学院修学休業制度による方式や、eラーニング等、様々な方式を用意しています。また、平成17年度から、長期履修制度も始まりました。

専攻は、学校教育・教育臨床心理・日本語支援教育の3専修からなる学校教育専攻（8人）と、国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・技術・家政・英語の10専修からなる教科教育専攻（30人）の2つです。



附属教育実践総合センター

「教育実践研究部門」では「学ぶ力」「生きる力」を高めるための学習カリキュラム及び指導法の開発、「教育情報科学研究部門」ではIT時代の到来を踏まえ、大きく変化する新しい時代の学習・教育環境の構築、「教育臨床研究教育部門」では学校不適應等、子どもが抱える様々な問題に対応できる力量をもった学生、現職教員の養成に努めています。



学校教育における子ども虐待防止フォーラム：分科会の様子



地域貢献としての教育体験学習：夏のひまわり学校の様子

附属学校

附属小学校

学部と一体となった体制で小学校教育の研究と実践、さらには教育実習の指導に努め、本県教育の維持向上の一翼を担っています。「幼稚園、小学校、中学校の12年間の連続した学びの中で、豊かな人間性を養い基礎・基本に支えられた確かな学力を培う教育課程・指導方法の研究」を研究テーマに幼・小・中一貫教育の実践研究を行っています。

附属中学校

昭和22年、宮崎師範学校の附属中学校として開設され、本年度で創立58年目を迎えた伝統のある学校です。「気品を保ち、社会の変化に主体的に対応できる個性豊かな生徒の育成」を学校の目標とし、「①自発的に学び、真理を探究しよう ②勤労を愛し、お互いに協力しよう ③気品を保ち、健康を増進しよう」を細目として掲げ、活力ある学校づくりを進めています。

附属幼稚園

昭和42年に開設され、今年で38年目を迎えます。広々とした園庭には、数十年を経過した銀杏や楠等が大きな枝を広げ、四季折々の豊かな自然環境を日々の保育に生かしています。「生き生きと活動できる子どもを育てる」を教育目標とし、子どもの自発的な活動を重視しながら、人とのかかわりを大切にした保育に努めています。



医学部：医学研究科



学 科	講座名	分野名	講座名
医学科 (24 講座) (23 分野)	基礎系	解剖学	臨床系 医学講座
		機能制御学	
	医学講座	病理学	
		感染症学	
		社会医学	
		分子細胞生物学 超微形態科学 神経生物学	内科学第一 内科学第二 内科学第三 精神医学 小児科学 外科学第一 外科学第二 整形外科学 皮膚科学 泌尿器科学 眼科学
		統合生理学 応用生理学 腫瘍生化学 機能生化学 薬理学 心理学 物理科学 物質科学	耳鼻咽喉科学 産婦人科学 放射線医学 麻酔学 脳神経外科学 歯科口腔外科学 臨床検査医学 救急医学
		構造機能病態学 腫瘍・再生病態学	
		微生物学 寄生虫学	
		衛生学 公衆衛生学 法医学 生命・医療倫理学 医療社会学 数理科学 英語 ドイツ語	
看護学科 (4 講座)	基礎看護学 成人・老年看護学 小児・母性（助産専攻）看護学 地域・精神看護学 医学教育改革推進センター（学部内措置）		

医学部 《2学科、28講座、23分野》

医学部は、平成49年国の無医大県解消施策・一県一医大構想のもとに設立された宮崎医科大学を前身とし、平成15年10月の統合により、その29年の歴史を終え宮崎大学医学部となった。

本学部の使命は「地域における医学・医療の中核機関としての役割を果たすと同時に、進歩した医学・看護学を修得せしめ、人命尊重を第一義とし、医の倫理に徹した人格高潔な医師、医学研究者、看護職者及び看護学研究者を育成し、国内外の医学及び看護学の水準向上と社会福祉に貢献すること」である。



医学科 (100人)

地域医療に貢献でき、国際的にも活躍できる優れた医師及び医学研究者の育成を目的とし、高度化し、多様化した医学界や社会のニーズに対して、豊かな人間性を備えた人材を育成し、医療・福祉の向上、ひいては国際社会へ貢献することを目指している。



看護学科 (60人)

情緒豊かな人間性と生命尊厳への畏敬の心を持ち、発展する高度医療福祉ニーズに対して、広い視野をもって実践できる看護職者の育成を目的とし、人々の健康と福祉さらに看護学の発展と看護の質の向上に貢献することを目指している。



医学系研究科 《修士課程 2 専攻、博士課程 4 専攻》

医学系研究科は、昭和55年に博士課程、平成15年に医科学専攻修士課程、そして平成17年に看護学専攻修士課程が設置された。

本研究科は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、学術文化の継承発展に貢献することを目標とし、医学の分野の発展と社会の福祉の向上に寄与する人材の育成を使命としている。



課 程	専 攻
修士課程	医科学専攻 看護学専攻
博士課程	細胞・器官系専攻 生体制御系専攻 生体防衛機構系専攻 環境生態系専攻



修士課程

医科学専攻

医科学専攻修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を養うことを目的としている。

看護学専攻

看護学専攻修士課程は、生命の尊厳を基盤に、生活者のQOLの向上を目指し、批判的思考や問題解決能力を持って看護の方法を探求・実践・開発することのできる高度な能力を養うことを目的としている。



博士課程

博士課程は、研究者養成を主眼とし、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力とその基礎となる豊かな学識を養うことを目的としている。



医学部附属病院

宮崎大学医学部附属病院は、医師養成教育機関として昭和52年10月に開設された地上7階の建物に、総病床数616を有する宮崎県における中核的医療機関です。

また、平成6年に特定機能病院の指定を受け、平成15年には日本医療機能評価機構による「病院機能評価複合B」の認定を受け、最新の高度な医療を安全に提供し、患者さん本位の医療を達成することを目指しています。

さらに、各診療科及び各中央診療部門には、最新の医療機器と優秀な医療スタッフをそろえ、医療内容の高度化、多様化に加え、時と共に変わる疾病構造の変化にも適切に対応できる体制を整え、地域に貢献できるより良い病院を目指しています。



本院の理念

- 患者中心に、心のこもった最適な医療の実践
- 地域の人々の要求にこたえる医療の実践
- 先端医療の開発と提供
- 幅広い知識、確かな技術を備えた人間性豊かな医療人の育成
- お互いを尊重し、力を合わせて医療に取り組み、働くことが楽しい病院づくり

患者さんの権利

本院は患者さんの権利を守ります。

- 誰でも良質な医療を公平に受けることができます。
- 診療の内容などについて、あらかじめ十分な情報と説明を受け、理解した後、同意あるいは拒否を選択する権利があります。
- 診療録に記録された自分の診療内容について、本院の規則に沿って、情報の提供を受けることができます。
- 診療内容その他について、あなたの情報は保護されます。
- 患者さんの尊厳は、医療行為のあらゆる場面において尊重されます。

附属病院

診療科

- 第一内科
- 第二内科
- 第三内科
- 精神科
- 小児科
- 第一外科
- 第二外科
- 整形外科
- 皮膚科
- 泌尿器科
- 眼科
- 耳鼻咽喉科
- 産科婦人科
- 放射線科
- 麻酔科
- 脳神経外科
- 歯科口腔外科
- 膠原病・感染症内科

中央診療施設等

- 検査部
- 手術部
- 放射線部
- 材料部
- 輸血部
- 救急部
- 集中治療部
- 周産母子センター
- 医療情報部
- 病理部
- 光学医療診療部
- リハビリテーション部
- 透析室
- 経営企画部
- 地域医療連携推進センター
- 医療安全管理部
- 卒後臨床研修センター
- 治験管理センター
- ME機器センター
- 遺伝カウンセリング部

薬剤部

看護部

病院案内図



工学部・工学研究科



工学研究科

博士後期課程

物質エネルギー工学専攻

システム工学専攻

博士前期課程

応用物理学専攻

物質環境化学専攻

電気電子工学専攻

土木環境工学専攻

機械システム工学専攻

情報システム工学専攻



工学部

材料物理工学科

物質環境化学科

電気電子工学科

土木環境工学科

機械システム工学科

情報システム工学科

工学部 《380人、うち編入生10人》

本学部は、宮崎県唯一の工学部として、“宮崎に根ざし、世界に目を向けた工学部”を目標に、今後ますます進展する高度な科学技術に挑戦し、創造することができる人材の育成につとめ、国際的にも評価される質の高い学術研究活動を進めています。さらに、地域産業の発展を推進することにより、地域社会に知的な貢献をすることにつとめています。本学部では6学科の連携協力による教育・研究分野の高度化、学際化、総合化を推し進め、21世紀の地球環境と共生できる科学技術の創造と、それを担う人間性豊かな人材の育成を目指しています。

材料物理工学科(49人)

現代の急速な技術的發展を支えているのは、ハード面では、集積回路などの材料となる半導体技術、衛星などの宇宙技術、またエネルギー源としての原子力技術、あるいは放射線や核磁気共鳴など利用した医療技術など、現代物理学を基盤とした高度な技術と言っても過言ではありません。更にそれを機能させるソフト面のインテリジェンス化も抜きにして語ることはできません。本学科では、このような先端技術を支える物理的知識を基礎から理解し、応用して社会の各方面で活躍できる人材を育成することを教育目標とし、またより新しい先端技術を切り開くことができる人材の育成を目指しています。

物質環境化学科(68人)

本学科は、平成17年度より日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定を受け、JABEEに基づく技術者教育プログラムを実施しています。地球環境問題に対する「物質環境化学」の役割と使命を教育し、地球環境や生態系に調和した新素材の開発や物質の利用及び循環・再生技術などに係る化学の基礎知識と応用能力を有する創造性豊かな人材を育成する教育研究を行っています。

電気電子工学科(88人)

急速に進みつつある高度最先端技術における先駆者の養成をめざして教育・研究を行っています。このため基礎から実用性の高い応用科目までをバランスよく配置したカリキュラムとなっています。基礎科目として、数学・物理学・電磁気学・電気回路などの知識を正しく理解した上で、専門科目の研究へと発展させていきます。

土木環境工学科(58人)

本学科は、自然との共生を図りつつ生活・経済・文化・安全を支える社会基盤の充実に貢献できる高度技術者の育成をめざしています。学部では技術者としての能力および土木環境分野における基礎能力の養成を教育目標としています。

機械システム工学科(49人)

21世紀、情報化社会においても、機械工学の果たすべき役割はますます大きくなってきています。本学科では、将来技術者として製造業などの研究開発、生産技術などの分野で活躍するために必要な、機械工学の原点であるものづくりの基本的な手法に係わる基礎および専門知識、具体的なものづくりの方法やエネルギーの利用方法の教育をし、これによって、新しい産業技術の開発を行ったり、総合的な立場から機械や機器の研究開発や評価を行うことができるような人材を育てることを目的としています。

情報システム工学科(58人)

現在の情報技術の進歩は目覚ましいものがあり、産業界や経済界の急速な発展を支えています。本学科では、このような急速に進展しつつある高度情報社会の各方面で幅広く活躍できる人材を育成することを教育目標とし、情報工学の高度な専門知識と現実社会での問題解決能力とを兼ね備えた人材の育成を目指しています。



工学研究科 (博士前期課程 114 人、博士後期課程 12 人)

工学研究科は、平成8年度に、それまでの修士課程を改組・拡充して「博士前期課程」及び「博士後期課程」を設置し、企業等からの社会人入学制度や秋季入学制度も取り入れ、宮崎地域における高度な工学的学術の教育・研究機関として、高度で専門的な科学技術者・研究者を育成するとともに、学術研究活動を推進しています。

博士後期課程からは、平成16年度に11名の博士(工学)が新たに誕生しました。平成10年度から課程博士72名、論文博士5名、合計77名の博士(工学)を輩出しました。これらの博士たちは、21世紀の科学技術の発展を担う高度な科学技術者・研究者として、地域社会はもとより、国際社会へも一層の貢献が期待されています。

博士前期課程

応用物理学専攻 (15 人)

本専攻では、物理学の基礎を重視しながらその応用を研究し、量子物理学、材料開発学、計測工学、数理学、医学物理などに関する教育と研究を行っています。

物質環境化学専攻 (21 人)

本専攻では、学部教育の「物質環境化学」を基礎として、地球環境や生態系と調和した材料化学、機能化学、物質化学および生物工学の分野に係わる物質環境化学の専門知識と柔軟な応用能力による専門的な研究開発能力を有し、研究成果を世界に発信できる創造性豊かな技術者・研究者の養成を目指しています。

電気電子工学専攻 (27 人)

近年の特にマイクロエレクトロニクスとそれに伴うコンピュータの発展によって、電気工学と電子工学も物理、数学及び化学など基礎科学をも取り込みながら進歩拡大してきています。そこで、電気電子工学の学問分野を、電子材料、電子システム及び電気エネルギーの3つの分野に大きく分け、各分野の具体的且つ先進的な研究・教育を行っています。

土木環境工学専攻 (18 人)

本専攻は、自然との共生を図りつつ生活・経済・文化・安全を支える社会基盤や生産基盤の充実・改善や、環境保全に貢献できる高度専門技術者の育成をめざしており、高度な専門知識の修得と研究開発能力の養成を教育目標としています。

機械システム工学専攻 (15 人)

本専攻では工業の基本である機械装置等の設計・開発についての基礎的な解析とその応用分野およびエネルギーの有効利用に関する教育と研究を行っています。その主なテーマは、材料強度学を含む材料力学、加工学・トライボロジーを含む設計工学、内燃機関を主とした熱工学、数値解析を含めた流体力学などです。





情報システム工学専攻 (18人)

本専攻では、並列プログラム言語、情報数理などの情報基礎分野、および知的制御系設計、知識情報処理技術などの情報応用分野に関する研究・教育を行い、より高度な技術と知識の研究・教育を通じて、情報科学・計算機科学・システム工学のより深い知識および広い応用能力をもつ人材の育成を行なっています。



博士後期課程

物質エネルギー工学専攻 (6人)

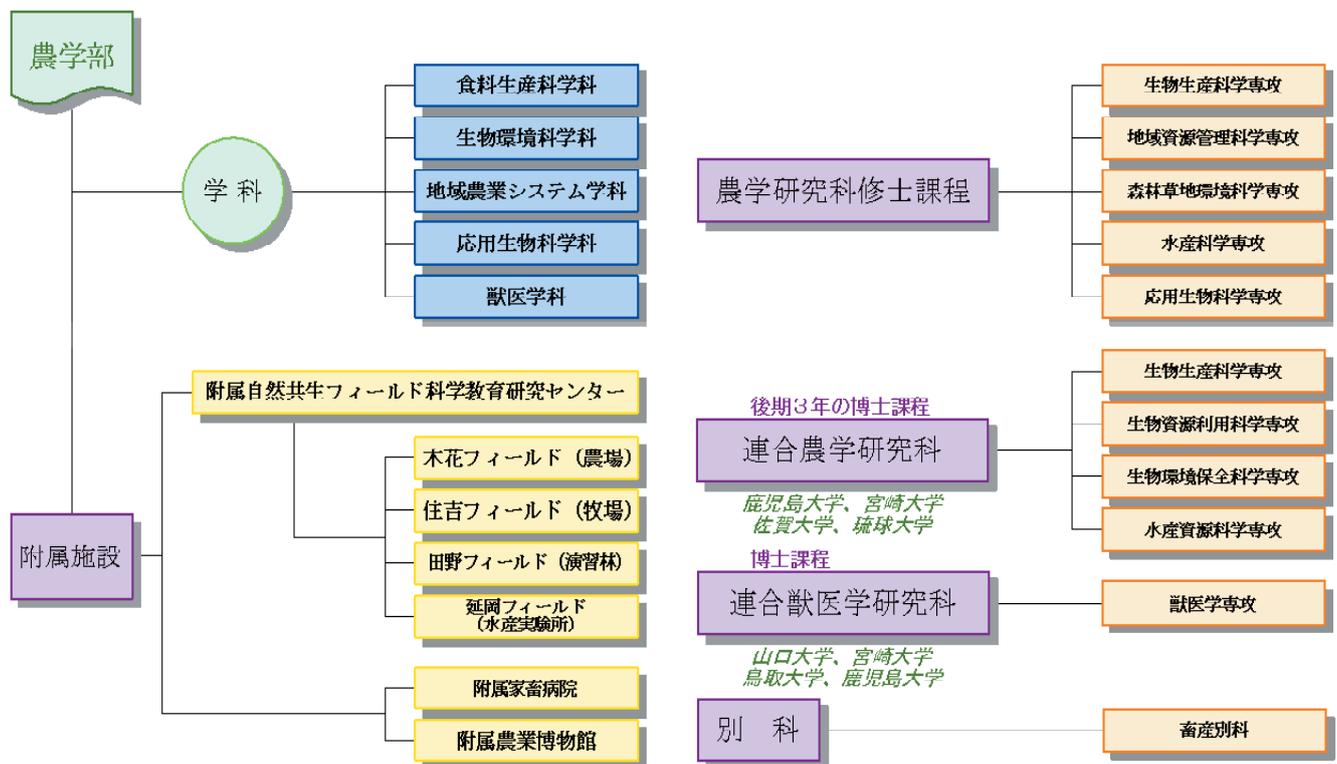
新素材および高機能性材料の微視的な基礎物性とその応用技術について、また社会を支える基盤としてのエネルギー源の開発とその有効利用についての教育研究を行い、それらを総合化して研究開発を行うことのできる優秀な人材を育成します。

システム工学専攻 (6人)

大規模で複雑な高度情報化社会の生活環境や生産技術環境を支え進展させるために、システム工学や数理的手法の理論および応用技術、あるいは、情報処理技術の研究を行います。また、自然との調和の中で発展できる生活・生産環境を目指した構造物の設計や加工プロセス技術の進展を図り、これらの分野の進展に大きく寄与できる人材を育成します。



農学部・農学研究科



農学部 《5学科、9大講座11講座》

21世紀農業の持続的生産のために食料生産科学科、生物環境科学科、地域農業システム学科、応用生物科学科、獣医学科の5学科により食料・生命・環境・地域に関する諸課題を究明し解決するための人材を育成します。特に課題探求型のカリキュラムを積極的に取り入れることにより主体性と創造性に富んだ個性豊かな人材を育成します。

学 科	大講座・講座		
食料生産科学科（60人）	植物生産科学講座	動物生産科学講座	
生産環境科学科（65人）	水産科学講座	草地環境科学講座	森林科学講座
地域農業システム学科（55人）	地域農林システム学講座	生産環境システム学講座	
応用生物科学科（55人）	生物機能科学講座	食品機能化学講座	
獣医学科（30人）	家畜解剖学講座	家畜生理学講座	家畜薬学講座
	家畜病理学講座	家畜衛生学講座	家畜微生物学講座
	獣医公衆衛生学講座	家畜外科学講座	獣医臨放射線学講座
	家畜内科学講座	獣医臨床繁殖学座	



農学研究科(修士課程)〈5専攻〉

農学分野の5専攻(生物生産科学専攻, 地域資源管理科学専攻, 森林草地環境科学専攻, 水産科学専攻, 応用生物科学専攻)により高度で先端的な科学技術を修得できる大学院教育を実施します。特に農林水産業における生物生産から生物資源・環境保全の利活用に積極的に取り組み、将来の食と健康を担う高度かつ専門的な技術を有する指導者・研究者を育成します。

専攻	生物生産科学専攻(21人)	地域資源管理科学専攻(12人)	森林草地環境科学専攻(10人)
	水産科学専攻(12人)	応用生物科学専攻(21人)	

附属自然共生フィールド科学教育研究センター

平成13年度に、自然共生を目標に総合的な農学教育・研究を行うため、自然共生フィールド科学教育研究センターが発足しました。そこには、共生システム農学、食総合科学、環境科学の3部門があり、木花フィールド(農場)、田野フィールド(演習林)、住吉フィールド(牧場)及び延岡フィールド(水産実験所)の4附帯施設が、フィールドセンターの教育・研究を支えています。

附属家畜病院

犬や猫などの病気の動物が大学周辺のみならず県外からも診察を受けに訪れ、地域動物医療の中心となっています。また、畜産地帯に位置するため、和牛などの産業動物医療にも力を入れ、地域の診療獣医師の相談・研修の施設としての役割も担っています。

附属農業博物館

農業をテーマにした博物館は、全国でも珍しく、国立大学法人の中では唯一のものです。館内には、農業、林業、畜産業、水産業などに関わる貴重な標本(動物・植物・土壌など)や、大学の最新の研究成果をわかりやすく紹介した展示があります。

畜産別科

高等学校卒業またはそれ以上の学力のある者が、農学部附属する牧場(住吉フィールド)に周年宿泊して1年間修業する課程で、広く畜産業における後継者や技術指導者を養成します。本別科の所定の単位を取得した者には、家畜人工授精師の資格が与えられます。

地域農林水産業教育研究センター

当センターは、地域に開かれた農学部の窓口として、学部における教育・研究の活性化、学部寄せられる多様な要望に応え、地域における農林水産業の発展に寄与するため、学部内措置により設置されています。



鹿児島大学大学院 連合農学研究科 (後期3年の博士課程)

鹿児島大学、宮崎大学、佐賀大学、琉球大学の4大学5学部の大学院農学研究科を連合して構成する博士課程です。高度な専門能力と豊かな学識を備えた研究者の育成を目的としています。

山口大学大学院 連合獣医学研究科 (博士課程)

山口大学、宮崎大学、鳥取大学、鹿児島大学の農学部獣医学科を連合して構成する博士課程です。獣医学に関する高度の専門的知識と豊かな学識をそなえ、かつ、柔軟な思考力と広い視野を持って社会の多様な方面で活躍できる高級技術者及び独創的な研究者の養成を目的としています。



附属図書館



附属図書館（以下、「図書館」という）は、本館（木花キャンパス）と医学分館（清武キャンパス）から構成されており、宮崎大学における教育・研究を支援する組織として、また地域に貢献する組織として活動しています。

図書館の役割は、学術情報の蓄積・提供、学習環境の整備などです。このため、図書館では長年にわたって、蔵書（蔵書数：約 60 万冊）を構築するとともに、近年はインターネットを介しての情報提供体制を整え、図書館資料（図書や雑誌など）が有効に活用される環境（ハード及びソフトの面）を整えるべく努めてきました。

これらのことを具体化するため、図書館では近年、学生用図書の充実、電子ジャーナル（学内限定でオンラインで利用できる学術雑誌）の整備等に努めています。また図書館を有効に活用していただくため、ホームページの充実、文献検索講習会の開催などを実施しています。

大学には社会との連携が強く求められていますから、図書館においても、地域の方に図書館を開放するだけでなく、県内の大学図書館、公共図書館との連携の進展にも取り組んでいます。



本館（木花キャンパス）



医学分館（清武キャンパス）

○利用者用 PC

本館、分館ともに、利用者用PCを設置しており、利用者の皆様がインターネット上の情報収集のため、レポート作成のために活用できるようにしています。

○コレクション

・大正新脩大藏經 全 100 巻

このコレクションは、膨大な数のインド仏典の漢訳を10年以上の歳月をかけて全100巻に編集したものです。梵語写本の多くが失われている現在、仏教研究者にとって漢訳仏典は非常に重要であり、特にこの大藏經はその校正の厳密さゆえに高く評価されています。

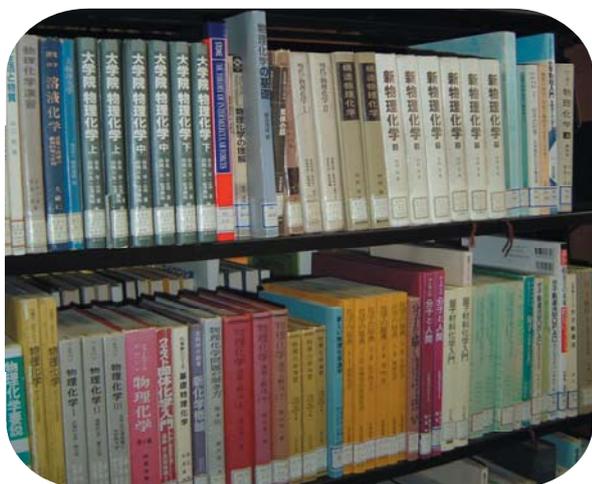
・イギリス教育史コレクション 467 点

このコレクションは、16世紀イギリスの人文主義教育思想家アスカムから20世紀に至るイギリスの教育思想(史)、教育史に関するオリジナル文献・研究書を幅広く収めています。

・アレン・ハット旧蔵 世界労働運動史コレクション 966 点

本コレクションは、「イギリス労働運動史」の著者として知られる労働運動史家アレン・ハットが所蔵していた、イギリス並びに英ソ関係を中心とした世界労働運動史の様々な文献から成り立っています。

図書館ホームページ <http://www.lib.miyazaki-u.ac.jp/>



学内共同 教育研究施設



生涯学習教育研究センター

当センターは、主に生涯学習に関わる調査・研究事業と教育・生涯学習支援事業を行っています。教育・生涯学習支援事業としては、本学学生の教育とともに、県民を対象とした大学公開講座の企画・運営、自治体の職員研修、生涯学習の推進に関する相談への対応等を行っており、生涯学習という観点から大学と地域社会の交流を図っています。



地域共同研究センター

新技術・新製品を開発し、地域産業基盤の向上に貢献することを目的に、大学の研究シーズと企業のニーズとの技術的交流を行う産学連携活動の拠点です。またインキュベーション施設としての活動に加えて、研究成果を権利化する知的財産本部や技術移転機関であるTLOとも連携して研究成果の活用による社会貢献を目指しています。



総合情報処理センター

大学内のネットワーク、情報処理教育システム、共同利用計算機システムの構築と管理運用を行い、研究・教育・事務等の活動を総合的に支援する学内共同利用施設です。また、学内のみならず宮崎地域の教育研究活動に広く貢献し、インターネット技術普及の中心的役割を担っています。



大学教育研究企画センター

入学・進路選択研究部門、共通教育研究部門、教育方法改善部門、教育評価研究部門の4部門からなり、入学者の選抜方法や学生が中心となる教育のあり方などを調査・研究しています。また、地域の教育機関との連携の窓口もあり、小・中・高校や他の大学等との連携の推進にも寄与しています。



フロンティア科学実験総合センター

「フロンティア科学実験総合センター」は、学際的な生命科学研究を行う「生命科学研究部門」と教育・研究活動を支援する「実験支援部門」の2部門で構成されています。

「生命科学研究部門」は、「生理活性物質探索分野」、「生体機能制御分野」、「生命環境科学分野」の3分野で構成され、21世紀COEプログラム「生理活性ペプチドと生体システムの制御」の中核を担っています。

「実験支援部門」は、旧宮崎大学と旧宮崎医科大学の附属施設を有機的に再編したもので、「生物資源分野」、「分子生物実験分野」、「機器分析分野」、「RI実験分野」の4分野で構成され、それぞれ木花分室と清武分室から成り、本学の広範な研究・教育活動の支援を主な業務とすると共に独自の研究を行っています。



キャンパス ライフを 支える施設



大学会館

大学会館は、1階等に食堂ホール及び購買部等が設置され、学生及び教職員の福利厚生に資するとともに、相互の交流の場として利用されています。また、2階、3階には学務部、大学教育研究企画センターが設置されており、学生の修学等の学生生活をサポートする施設として利用されています。



学生寄宿舍及び国際交流宿舎

学生に良好な生活と勉学の間を与え、その修学を容易にすることを目的として、大学の敷地内に男子寄宿舍、女子寄宿舍及び日本人学生と外国人留学生とが居住する国際交流宿舎が設置されており、国際交流宿舎Ⅱには、外国人留学生及び外国人研究者の夫婦、家族室があります。また、農学部住吉フィールド（牧場）には、畜産別科生が入居する住吉寄宿舍があります。



体育施設・課外活動施設

○体育施設

- ・体育館（バレーボール・バスケットボール・バドミントン・卓球等）
- ・陸上競技場（400m）
- ・テニスコート（ハード・クレイ）
- ・プール（50m）
- ・武道場
- ・弓道場
- ・馬場（厩舎）
- ・その他（運動場、球技コート、多目的グラウンド、相撲場等）

○課外活動共用施設（サークル共用室等）



安全衛生保健センター

安全衛生保健センターは、学生及び職員の心身の健康管理に対する専門的サービスを身体及び精神両面から包括的に行っており、また労働安全衛生等についても指導しています。

そのために以下の業務を行います。

1. 定期及び臨時健康診断
2. 健康相談及び一次救急処置
3. 健康診断の事後処理と必要に応じた結果還元
4. 心の健康保持に必要な精神医療相談
5. 学内の環境衛生等の立案に関する討議や指導助言
6. 保健管理・労働安全の充実・改善・向上に向けた調査研究
7. 健康保持増進への予防医学的啓発と学生への共通及び専門教育の支援
8. その他、学生及び職員の健康保持・労働安全衛生に関し必要な専門的業務



宮崎大学サテライト・オフィス

宮崎大学サテライト・オフィスは、地域社会への情報発信の場として、また地域社会の人々と交流しニーズを捉えるアンテナとして、さらには他の教育研究機関との交流・連携や産官学交流・連携の場として、機能することを目的に（平成16年3月、宮崎市の中心地に位置するカーリーノ宮崎：8階）、設置されました。

サテライト・オフィスには、パソコン等を備えスタッフが窓口での対応にあたる他、次の業務を行っています。

(1) 情報発信機能

- 教育・研究成果の公開・発表
- 入学案内や各種催し物の案内
- 上記の常設展示

(2) 市民との交流促進

- 公開講座、学術セミナー、高大連携セミナーなどの開催
- 各種相談窓口（技術、教育、健康など）
- 大学主催あるいは大学が事務局となる会合の開催

(3) 他大学など教育研究機関、自治体、産業界との交流連携

- 他大学などと連携した各種事業の展開（公開講座、学生セミナーなど）
- 県と連携したコンソーシアム事業の展開



国際交流

宮崎大学は、国際交流事業として①研究者交流、②留学生交流、③国際開発協力の3つの柱を据え、地理的・歴史的な関係から、東アジア・東南アジアの大学等を中心に、活発な交流を展開しています。

研究者の海外派遣・受入れ

文部科学省の海外先進教育研究実践支援プログラム・科学研究費補助金による海外派遣をはじめ、日本学術振興会、国際協力機構及び各種機関の助成により、年間約300人の研究者が海外に派遣されており、外国人研究者も積極的に受入れています。

国際開発協力

本学ではJICA（国際協力機構）やNGO等と連携しながら、アジアやアフリカ、中南米等の開発途上国に対して積極的な国際開発協力を展開しています。

国際交流協定

全学的・戦略的な学術交流・学生交流を推進するため、29の国や地域の大学等と交流協定を締結しています。うち、6大学とは学生交流覚書（授業料等相互不徴収）を締結し、活発な学生交流を図っています。

留学生の受入れ

23カ国から国費・私費・政府派遣・県費の留学生90名を受け入れ、教育研究を行うと共に、生活支援、学内での交流事業等を実施し、諸外国の指導的人材の育成に努めています。

学生の海外派遣

宮崎大学では、学生交流覚書を締結している大学に、学生を派遣しています。協定による留学は、休学の必要がなく留学先の大学の授業料等は免除されます。

短期学生交流の実施

異文化交流体験学習の一環として、海外の大学と短期学生交流を実施しています。学生が相互訪問し、ホームステイ等を通じ、お互いの文化を学び、交流を深めています。

地域社会の国際化への貢献

本学の外国人留学生は、県内の小中学校における各種国際交流事業や、国際交流団体が開催する国際理解事業等に参加し、地域社会の国際化へ貢献しています。



大学の研究紹介

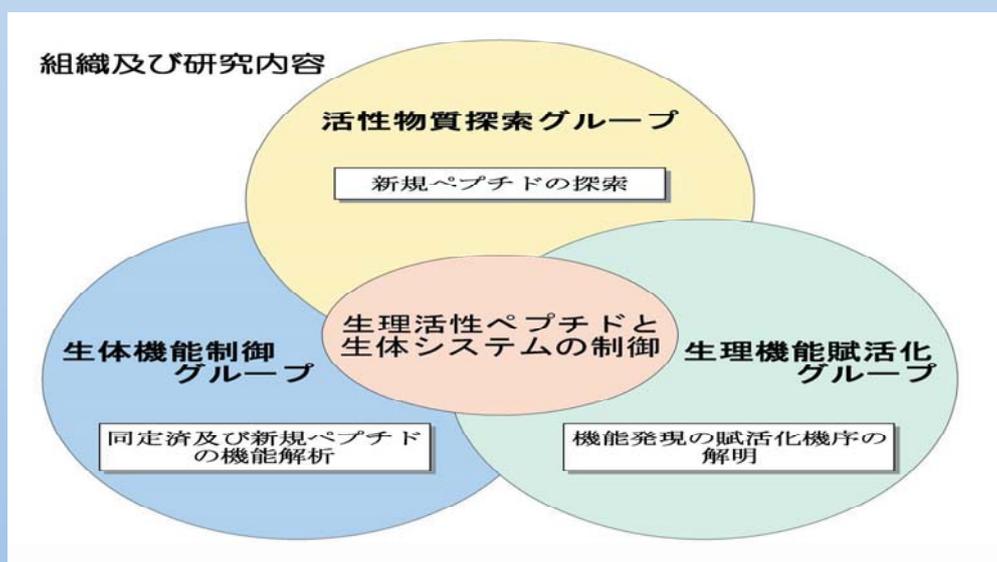


21世紀 COE プログラム

医学部（旧宮崎医科大学）が創設以来世界に誇り得る最も大きな研究業績は、松尾壽之・前宮崎医科大学長（生化学第二講座・初代教授）の指導で推進されてきた「未知の生理活性ペプチドの探索研究」であり、心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）、BNP、CNPなどのナトリウム利尿ペプチド・ファミリーの研究は特筆すべき業績である。この生理活性ペプチドの探索研究は、アドレノメデュリンやグレリンなどの発見とその生理作用の研究へとつながっており、本学部は生理活性ペプチドの探索研究で、常に世界のリーダー役を果たしてきた。

このような卓越した研究業績が認められ、第三者評価に基づく競争原理により、世界的な研究教育拠点を学問分野毎に形成し、国際競争力のある世界最高水準の大学作りを推進するための文部科学省の21世紀 COE プログラムに、平成14年度の生命科学分野で「生理活性ペプチドと生体システムの制御」が採択された。

本プログラムは、医学部及びフロンティア科学実験総合センターの基礎・臨床の研究者で構成されており、その最も大きな目的は、自分達の手で新しい生理活性ペプチドを発見し、その作用を解明し、未知の生体システムの存在を明らかにすることである。効率的な研究推進のため、新規生理活性ペプチドの探索研究を軸にして、関連分野との共同研究体制をより密にし、次の3グループで研究を実施している。1) 新規生理活性ペプチド（リガンド）の探索研究を行う活性物質探索グループ、2) 既知及び新規に発見される生理活性ペプチドの機能を調べる生体機能制御グループ、3) ペプチドやタンパク質の生理機能発現のための賦活化機序を調べる生理機能賦活化グループである。これらの研究グループは相互作用と交流を促進しながら、新たな生体システムを明らかにするために研究を行っている。





宮崎県地域結集型共同研究事業

地域結集型共同研究事業とは科学技術振興機構（JST）の支援のもとに、各都道府県等の地域が、研究開発目標へ向け、地域の大学、国公立試験研究機関、民間企業等を結集して行う共同研究です。このことにより、新技術・新産業の創出とともに、事業終了後は成果を活用しさらに研究を発展させる体制（地域COE）の構築を目指しております。支援事業費は年間約2.5億円程度、実施期間は5年間（平成16年1月～平成20年12月）です。宮崎県が提案致しました事業タイトルは「食の機能性を中心としたがん予防基盤技術創出」です。南九州特有の風土病であります成人T細胞白血病（ATL）及び肝細胞がんという、ウイルス感染を背景に発症するがんの発症機構・進展因子を解明し、食の機能性を中心とした予防・治療法を開発することを目的としております。食の機能性については、機能性評価法の開発、機能性発現に必要な栽培・育種・加工技術等の確立、がん予防に効果のある高機能性食品の開発など、一連の新技術開発に取り組みます。

研究体制：本プロジェクトは医学と農学という異分野を融合して進める点が特徴であり、本学の医学部・農学部だけでなく、宮崎県工業技術センターなど15機関から参画した総勢73名の研究者によって、推進されています。

都市エリア産学官連携促進事業 「バイオマスの高度徹底活用による環境調和型産業の創出」

本事業は、都城盆地エリアを対象として平成16年度から3年計画で実施されます。宮崎県産業支援財団を中核機関とし、宮崎大学工学部・農学部、都城工業高等専門学校、宮崎県木材利用技術センター等の公設試、更に、県内多数の企業等で構成される幅広い農工連携研究推進体制により、宮崎地域の特色ある研究として取組まれています。

本事業は、未利用の木質バイオマスのエネルギーの徹底的な活用を機軸とした豚ふん焼却処理・木材乾燥システムを開発すると共に、これから派生した焼却灰、排出液や二酸化炭素等を原料とした有用物質の回収や新規機能性物質の開発により、林産業の振興、農畜産の環境調和型への転換及び環境関連の新技術・新産業の創出を図り、安全で快適な循環型社会の形成及び産業の振興を目指すものです。

2つの研究テーマと6つのサブテーマは、以下となっています。

(1) 低品質木炭を助燃剤とする家畜排泄物処理とそのエネルギーカスケード利用システムの開発

①低品質木炭の製造及び豚ふんとの混合条件の確立、②燃焼・排熱回収システムの開発、③木材の乾燥及び熱利用

(2) バイオマス活用システムから派生する有用物質の回収及び新規機能性物質の開発

④木材乾燥排出液からの有用物回収及びその利用、⑤家畜ふん・低品質木炭混合燃焼焼却灰からのリン回収、⑥燃焼炉からの派生物を利用した微細藻類等独立栄養物の培養とその応用

多くの分野で構成される約40名の研究者は、従来の研究領域を越えて連携を強め、精力的に研究を進めています。



ベンチスケール炉による混合燃料の燃焼実験

○施設位置図



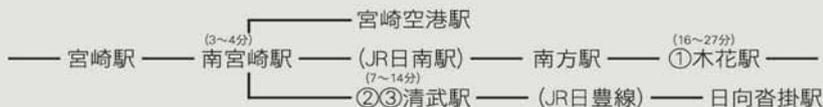
○宮崎大学へのアクセス



日南海岸 国定公園

◇交通案内

J R



※南宮崎駅の上段()書は、宮崎駅からの所要時間を示し、木花駅及び清武駅の上段()書は、南宮崎駅からの所要時間を示す。

- ①木花駅下車⇒バス停「木花」利用(徒歩10分)→木花経由652番線→宮崎大学(約8分)
- ②清武駅下車⇒バス停「清武町役場」利用(徒歩10分)→
 - 赤江山崎経由 651番線
 - 清武経由 650番線
 - まなび野経由 641番線
 →宮崎大学(約12分)
- ③清武駅下車⇒バス停「清武駅前」利用(徒歩3分)→清武経由650番線→宮崎大学(約13分)

バス

(医学部へは「大学病院」で下車)

- ①木花経由(宮崎交通652番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―国富小―木花―宮崎大学(約50分)
- ②赤江山崎経由(宮崎交通651番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―農高前―赤江―清武町役場―大学病院―宮崎大学(約1時間)
- ③まなび野経由(宮崎交通641番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―農高前―県立看護大学―清武町役場―大学病院―宮崎大学(約1時間)
- ④清武経由(宮崎交通650番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―追分―正手―清武駅前―大学病院―宮崎大学(約50分)
- ⑤正連寺経由(宮崎交通653番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―農高前―木花―正連寺―木花郵便局―宮崎大学(約50分)
- ⑥清武経由(宮崎交通600番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―追分―正手―清武駅前―大学病院(約40分)
- ⑦木花経由(宮崎交通602番線)
宮崎営業所(宮崎駅前)―宮交シティ―国富小―木花―大学病院(約40分)

タクシー

- ・JR宮崎駅から ―― 約35分(約30分)
- ・JR木花駅から ―― 約6分
- ・宮崎空港から ―― 約20分(約15分)
- ・JR南宮崎駅から ―― 約25分(約20分)
- ・JR清武駅から ―― 約15分(約10分)

※()内は清武キャンバスへの所要時間

国立大学法人宮崎大学概要

平成17年7月発行

編集発行 国立大学法人宮崎大学広報戦略室

映像・デザイン・レイアウト：早野 慎吾

デザイン協力：比和 恭子・鈴木 翠

〒889-2192 宮崎市学園木花台西1丁目1番地

TEL(0985)58-7106 FAX(0985)58-2886

<http://www.miyazaki-u.ac.jp/>



UNIVERSITY OF MIYAZAKI